

2019 年 12 月 29 日（日）「積極的赦し——再召命」

ヨハネ 21:15-17

15 彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの小羊を飼いなさい。」16 イエスは再び彼に言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を牧しなさい。」17 イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロは、イエスが三度「あなたはわたしを愛しますか」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ。あなたはいつさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」

【序論】

2019 年最後の主日礼拝となりました。毎年この時期には、年間 52 回の礼拝が一度も欠けることなく守られたことを深く主に感謝しています。つくづく、これは人間の働きではなく「主の働き」であることを実感するのです。一年の締めくくりとして毎年取り組んでいることですが、今日も『最後まで走り抜け』（D. ワング）という本をベースに語らせていただきます。ここしばらく、マタイ福音書ではペテロの失敗の記事を扱っておりました。しかし、26 章の「三度の否認」を最後に、ペテロの名前はマタイ福音書に出てこなくなるのです。まるで「失敗者」のまま終わってしまったかのような印象を残している。彼の名誉のためにも、ヨハネ福音書に描かれた彼の回復劇を見て、この年を終えたいと思います。ペテロは主イエスの弟子として再出発することになりますが、その姿はかつてのような自信満々のペテロではありません。言葉にどことなく自信がなく、主の再召命に答えてよいものかどうかという躊躇^{ためら}いすら感じさせる態度です。今日は、「失敗の章を閉じる」という視点で学んでまいります。失敗は誰にとっても付き物であり、人間を気弱にさせるものです。真に働き人として回復していくためには何が必要なのでしょうか。

【本論】

本論 1. 失敗の記憶

ペテロは十二弟子の筆頭であり、おそらく年長で、声も大きく、発言力もあったことでしょう。そして、あまり深く考えずに口にする言葉が重要な真理を秘めていることもあり、主イエスの賞賛を得たこともありました。ペテロは本当に主イエスを愛し慕い、心の中では主に従い抜こうという決意を抱いていたはずですが、彼はつまずいてしまいました。主イエスが捕えられ、大祭司カヤパの邸宅で裁判を受けておられるとき、その様子を見ようと中庭に忍び込み、下役どもに混じって焚き火に当たっていた。その時、一人の少女にイエスの弟子であることが指摘され、そこに居合わせた人々によって次々とペテロの素性が明らかにされていったとき、彼は恐れに取り憑かれ、主イエスとの関係を否定しました。それも、一度ならず三度までも主を否んだのです。この経験は「イエスの弟子」としてのペテロのアイデンティティを決定的に打ち砕きました。まさに、泣く泣く踏み絵を踏んだキリシタンの心境だったのではないのでしょうか。自分は信仰を棄てた。自ら主イエスとの関係を断ったのだ。もう引き返すことのできない道に踏み外してしまったという深い自責の念に囚われ、ペテロは自分を責め続けたことでしょう。

人は失敗をするとき、とりわけ誰かの信頼を裏切るようなことをしてしまったとき、元いたポジションに二度と戻れない感覚を覚えます。私にも過去に人の期待を裏切ってしまった経験があり、神と人に赦されていないという思いに長年苦しみました。それだけでなく、失敗を犯した人は、たとえそれが赦されたことを知ったとしても、自分が自分を許せぬところで苦しみ続けることが多いのです。

ペテロは復活の主と出会っていました。そして、主が弟子たち全員をお赦しになったことを知っていました。にも拘らず、彼は漁師に戻っていったのです。彼の中で、自分は失格者だという気持ちが拭い去れなかったからです。ペテロの中には、自分は主イエスによってもう諦められた存在だという意識がありました。

著者は、「誰かを失望させたとき、失敗の章を閉じる上で、私たちが聞きたいと願う4つの事柄がある」と言います (p. 207)。

- ①あなたは赦された
- ②あなたは今も有用だ
- ③こういうわけで、あなたは失敗した
- ④このようにすると、再び失敗することはない

主イエスはペテロに対してこれら一つ一つを語り、彼の傷を癒していかれました。

まず、主イエスはペテロが赦されていることを再確認するよう行動されました。カヤ

パの邸宅の中庭で経験したことを敢えて思い出させるようなシチュエーションを用意されたのです。ペテロが漁に出ているとき、主は岸辺から舟の上にいる弟子たちに声をかけられました。そして、朝食のために火を焚いて待機しておられました。この火は、ペテロがあの日、焚き火を囲みながら三度主を否んだ経験を思い起こさせたことでしょう。主はペテロに、失敗を失敗としてしっかりと見つめさせることから始めたのです。しかし、そこには「赦し」が並べられていました。主はペテロと食事を共にしようと考えられた。食事を共にすることは、両者の間に平和があること、互いの間に何のわだかまりもないことを示す行為でした。これは、主イエスとペテロとの間の友情のしるしだったのです。

本論 2. つまずいた所に戻る

今日の聖書箇所には、主がペテロに三度問いかけられた言葉が記録されています。第一の問い：「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか。」(15 節) 「この人たち」という言葉は原文では「これら」であって、中性名詞とも男性名詞ともとれることから、二つの意味に解釈が可能です。中性名詞なら漁師としての仕事（舟、網、魚）、男性名詞なら他の弟子たちとなります。新改訳が訳しているように、おそらく主は他の弟子たちのことを言っておられるのでしょう。それは、ペテロがかつて「**た**とい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません」(マタイ 26:33)と豪語していた言葉に対応させるためです。あの時のペテロの心には高ぶりがありました。プライドがあり、他の弟子たちよりも自分の方が優れていると思っていた。彼のつまずきの原因は、実はここにあったのです。ペテロは主イエスだけを見つめている限りにおいて、弟子として確固たる道を歩むことができました。しかし、周りを気にし、人と自分を比較し始めたとき、道を踏み外したのです。

これはすべての信仰者に言えることでしょう。牧師も信徒も、主イエスだけを見つめていなくてはなりません。人ばかりに目が行き始めると、人がやっていることに腹が立ったり、非難したり、人と自分とを比べて劣等感／優越感を覚えるということが起きてきてしまいます。いずれにしても、主に対して罪を犯すことになる。なぜなら、人と自分を比べるところで行なわれる「奉仕」は、「肉の思い」から出ているからです。その奉仕は神に向けられているのではなく、実は自分自身に向けられている。主イエスを見つめ、主が自分をどのように召してくださっているかに集中するとき、私たちはプライドや苦々しい思いから解放されるのです。

第二と第三の問いは同じです。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか」(16

節、17 節)。第一の問いと違うのは「あなたは、この人たち以上に」という部分が消えている点です。他人と自分を比較するというつまずきの原因には気づきを与えられ、解決されました。しかし、三度同じ問いかけをなさったところには、ペテロが三度主を否定するという回数的な対応があるでしょう。主はこのようにして、ペテロの一回一回の「否認」を消していかれたのです。「誰かを失望させたとき、失敗の章を閉じる上で、私たちが聞きたいと願う 4 つの事柄」のうちの三つ、「①あなたは赦された」「③こういうわけで、あなたは失敗した」「④このようにすると、再び失敗することはない」には解決が与えられたと言えます。しかし、失敗の章を閉じるためには、更なる段階に踏み出すことが必要になる。それが、再召命です。

本論 3. 赦しの積極面：「再召命」

最後の課題は、「②あなたは今も有用だ」であります。先の三つの解決が「失敗を拭く」という「赦しの消極面」であったのに対し、「あなたは今も有用だ」という語りかけは「赦しの積極面」であると言えます。実は、これがないと人間は真に立ち直ることができないのです。もう一度用いられることによって、その人は過去の失敗から本来の意味で解放されていく。

主イエスの三つの問いに対するペテロの返答は最初の二回が「はい。主よ。私があなたを愛することは、あなたがご存じです」（15 節、16 節）と、同じ表現が用いられている。念のため、原文の説明をさせていただきます。ここで主イエスが使っておられる「愛する」（アガパオー）という言葉は「人類の救いのために神がひとり子イエスを惜しまず与えてくださった愛」「無条件の愛」を表すのに対し、ペテロは「友愛」を表す「フィレオー」でもって答えている。そして、三度目の問いかけのとき、主イエスはペテロが用いた「フィレオー」に直して「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか」と問うておられる。この単語の使い分けに意味があるのか、それとも単なる修辞学的な技法にすぎないのか、あるいはいずれも神的愛を表すのに使われている言葉であるからまったく置き換え可能なのか、学者間でも議論があります。

著者の見解を述べるならば、彼は主イエスが三度目に言葉を弱めたことによって、ペテロは取り乱したはずだと言います（p. 213）。「ペテロの愛はペテロが考えているほど強くないことをイエスは主張された」。そうなのかもしれません。いずれにしても、ペテロは「主を愛し抜く（従い抜く）」ことのできなかつた自分を知っているのであり、肉の力ではそれが達成できないことを、身をもって体験してきました。このように完全に人間的な自信が打ち砕かれた人がもう一度主の弟子として歩み始めるためには、主の

導きに引かれていくことが必要なのです。

主イエスは三つのことばをもって、ペテロに牧会者として再出発する道筋を示されます。「わたしの小羊を飼いなさい」(15 節)、「わたしの羊を牧しなさい」(16 節)、「わたしの羊を飼いなさい」(17 節)。これらは同じ事柄の言い換えでしょう。主はペテロの失敗を拭っただけでなく、もう一度働き人として召してくださったのです。そこには明確に「あなたは今も有用だ」というメッセージが隠されています。

シンガポールの教団の長老の一人が罪に陥ったとき、彼は涙ながらにこう祈ったそうです。「ああ神様、どうか私の名前をあなたの奉仕記録帳から消し去らないでください」。著者は次のようにコメントします。「何物にもまして、彼は主の働きにおいて依然として用いられることが可能かどうか知りたがっていた」(p. 210)。教会という共同体は、罪を犯した人をまず悔い改めに導く責任があります。そして、その人が真に主の御前にへりくだり、罪を悔いているならば、再び奉仕のチャンスを与えて差し上げる必要があります。主イエスがペテロになされたことは、教会でも形を変えて実現されなくてはなりません。

【結論】

2019 年を振り返るとき、私たちは様々なことを思い出すでしょう。自分の罪も、人の罪も知っているはずですが。そして、まだ実現に至っていない「許し」が存在することも自覚しているのではないのでしょうか。それらを主の御前に差し出し、主イエスがどう取り扱われるかというところに、問題の解決を委ねたいと思います。そして、主の解決に自分の心を合わせていくことができるように。私たちも人を許し、また許される道筋を辿ることができるように。来年も主の憐れみのゆえに奉仕者として歩み抜くことができるよう、祈りましょう。

【祈り】

赦しと回復とを与えた給う神よ。私たちは弱さをもつ人間の集まりです。それでも神の民とされています。赦しを必要としない人はありません。しかし、許すことは難しく、赦されたことを確信することもまた難しいものです。主イエスはペテロに回復の道筋を丁寧を与え給いました。同じ道が私たちにも示されています。主イエスの心がこの教会で実現されていきますように。隣人同士の関わりの中で、主の赦しと憐れみが現れていく教会とならせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人の失敗をそのままに捨て置かず、それを見つめさせるところから、回復へと導き給う、
父なる神の愛。

赦しを宣言し、新たな働きへと召し出し給う、主イエス・キリストの恵み。

赦しを受けた者を、許しを与える者へと造り変え給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。